

聖地のこどもニュース

オリーブの木

No. 64
2017年 5月



2017年スタディーツアーでの一コマ。聴覚障害児のためのエフェタ学院を訪問。(ベツレヘム)

今春のスタディ・ツアーのあと、私は数日一人でエルサレムに残って、いくつかの学校訪問をしました。子どもたちの無邪気な笑顔、はじけるようなエネルギーは世界中どこでも同じです。制服を着ていると、貧富の差は見た目では分かりませんが、皆様のご支援のお陰でやっと学校に来られている子どもがいます。学校施設も貧しいところが多いのです。

気がかりなのはこの子どもたちの将来です。今年は1967年の中東戦争でイスラエルが勝利し、パレスチナの占領政策が始まってから50年目を迎えるにもかかわらず、未だに紛争が解決していないのです。つまりこの子たちの父母や祖父母さえも、平和な時代を知りません。将来の展望が見えない若者たちの多くは希望の光を外国移住に求めています。しかし若者が海外流出してしまったら、パレスチナの建国はどうなるのでしょうか？ 深刻な問題です。若い世代の平和教育の必要性が痛感されます。皆様、どうぞ引き続き彼らを応援して下さいように。

井上 弘子



認定NPO法人

聖地のこどもを支える会



当NPOは、国際協力NGOセンター(JANIC)によるアカウンタビリティ・セルフチェックを受け、基準の4分野(組織運営・事業実施・会計・情報公開)について適正に運営されていると審査されました。

事務局 〒164-0003 東京都中野区東中野 5-8-7-502 Email ispalejpn@gmail.com TEL/FAX 03-6908-6571

ご支援は… 郵便振替 00180-4-88173 加入者名 「NPO法人 聖地のこどもを支える会」

当法人へのご寄付は、税制優遇が受けられます。

<http://seichi-no-kodomo.org>

“エフェタ学院”※からの里子だより

※聴覚障害児のためのパウロ6世エフェタ学院

ご支援をいただいている“エフェタ学院”の里子たちの成長ぶりをごらんください！ 子どもたちはほとんどイスラム教徒。ここでは将来の社会生活に対応できるように、声帯の機能が残っているかぎり、声を使って話すことを学びます。また読唇術によって相手を理解できるよう教育されています。何年も続けてご支援くださっている里親の皆様、ほんとうにありがとうございます。引き続きよろしくお願いいたします。

マイス・アワド 9歳 ベイト・オマル村

マイスは6年生、しっかりと勉強し、最近はとても良く話せるようになりました。先生たちは彼女の大きな可能性を見抜いて楽しみにしています。特に英語の授業に一番興味を持っています。

縄跳びが大好きで、自由時間にはいつもびよんびよん跳んでいます。小さな村に住んでいて、やはり耳の聞こえない弟とともに通学しています。両親は貧しくても惜しみない愛情を注ぎ、明るくしっかりした女の子として成長しています。

クセイ・オデ 10歳 タルクミア村

進歩を続けている4年生、英語やスポーツが大好きな男の子です。特にサッカーが好きです。腕白坊主で、クラスではボスの存在です。身なりはきちんとしているとは言えません。それは父親の給料があまりにも少なく、家族が食べていくのがやっとだからとか。

学校での態度は、昨年と比べると先生の話に注意深く聞き、いろいろな規則に従うことができるようになりました。



ました。成績も良くなりました。将来の夢は、父親のように警察官になることだそうです。

シャヘド・ジアダ 12歳 ワディ・ラハル村

6年生、成績はクラスでもトップです。しかし重度の聴覚障害で、現在、篤志家からの人工内耳インプラントの寄付を待ち望んでいます。

父親が働かず、家族を全く顧みないので、彼女も妹も、とても苦しんでいます。そんな困難にもかかわらず、成長ぶりは目覚ましいものがあります。一生懸命勉強して良い成績を収めています。算数と図工が大好きです。兄2人が他からの支援を受けて大学を卒業してからは、状況が少し好転したようですが、まだまだ大変です。

アリア・アル・ハジャハジャ 12歳 ベツレヘム

今年7年生（中1）、とても成績が良く、笑顔の絶えない優しい子です。父親は娘をかわいがり、母親もよく彼女の世話をするので、いつも清潔なさっぱりした服装をしており、つやつやした黒髪がすてきです。

色彩が大好きで芸術的なセンスがあります。スポーツも好きですが、残念ながら彼女の住んでいる村は、スポーツ施設が何もありません。

明るくて想像力に富んだ子。授業中集中力を切らず、先生の言葉に耳を傾けているので、どんどん学力を伸ばしています。彼女の夢は先生になることですが、その能力は十分にあるでしょう。



マリアちゃん(5歳)、ジョセフィーヌちゃん(6歳)、ザインくん(10歳)、ファディくん(10歳)などが、里親を探しています

顔の見える支援 里親募集中！

里親は、ある特定の子どもの教育を、毎月一定のご支援で継続的にサポートする制度です。里親と里子の間で写真や手紙の交換をすれば(任意)、個人的なつながりが持て、子どもの成長を身近に見守ることができます。

お問い合わせは
当法人
事務局まで

03-6908-6571



ゼン・アッディーン アブ・ファイラト 4歳

ヘブロン 里親募集中!

幼稚園の年中組です。話すことがまだ困難なので、今年は、発音と語彙の増加を中心に専門的なスピーチ・セラピーを行う予定です。



ヘブロンからバスで通学していますが、大好きな先生や友だちがいるので、学校ではほんとうに幸せそうです。同じく聴覚障害を持つ弟と学校に来る時は、特に嬉しそうです。

数字や文字を覚えるのが得意で、色彩感覚が優れており、上手に色を使って遊んでいます。サッカーも大好きです。

2017 スタディ・ツアーの感想



東條慎之佑 (大学4年生)

この春のスタディ・ツアーでは、現地の人々と心を通わせ、紛争下の様々な現実を直視するなど、実に貴重な体験をすることができた。私にとって最も大きな実りは「平和とはなにか」という問いを深く掘り下げて考えられたことだった。

私たちはツアー中、イスラエル・パレスチナ紛争に対して、第三者の私たち日本人がどのように関わればよいかを考えた。現地の若者の日本に対する認識は、「紛争のない国」というものだ。また、一口に「紛争 (conflict)」といっても様々な意味を持つ言葉であると気づかされた。それは、死海でイスラエル・パレスチナの若者に行ったミーティングで、それぞれ日々抱える様々な葛藤の分かち合いをした時だった。私たちには、日常的な家族・友人との小さな争いから武力紛争にいたるまで、実に多様な「コンフリクト (紛争)」がある。

私たちはツアー中、イスラエル・パレスチナ紛争に対して、第三者の私たち日本人がどのように関わればよいかを考えた。現地の若者の日本に対する認識は、「紛争のない国」というものだ。また、一口に「紛争 (conflict)」といっても様々な意味を持つ言葉であると気づかされた。それは、死海でイスラエル・パレスチナの若者に行ったミーティングで、それぞれ日々抱える様々な葛藤の分かち合いをした時だった。私たちには、日常的な家族・友人との小さな争いから武力紛争にいたるまで、実に多様な「コンフリクト (紛争)」がある。

共通しているのは、「当事者間に認識の相違があり、コミュニケーションが欠けている」ことだ。私はイスラエル・パレスチナ両者の関わりがほとんどないことを感じた。前者は分離壁には基本的に近づく、壁の向こう側の状況にほとんど関心を持っていない。また、後者は紛争に対してある種のあきらめや無関心を示すことも少なくなかった。両者はどうしようもなく隔絶されているのだ。このような現状に第三者の私たちがどう関わればよいのか。ま

ずはイスラエル・パレスチナの認識の違いを縮めるコミュニケーションを促進することだと思った。

ただ、当事者相互のコミュニケーションが「紛争」解決の鍵になると思う一方で、「紛争」の解消が直ちに平和の実現を意味するものではないことも痛感した。

物価の急激な上昇により住む場所を追いやられる人々（特に、エルサレムのユダヤ教徒とムスリムに挟まれ、マイノリティーとして揺れ動くキリスト教徒）、また、分離壁によって様々な経済的困難を抱えた人々。難民キャンプや障害者施設で、自力で生きていくのが難しくなった若者たち、名誉殺人を免れた子どもたちなど、ハンディキャップや社会的孤立といった苦しみを抱えた人々の現状も目の当たりにした。

イスラエルとパレスチナ間という大きな枠組みだけでなく、国家や社会から疎外されて苦境に置かれている「個々人」の苦しみもまた、紛争の一面だ。こうした現実を踏まえると、紛争解決のためにイスラエル・パレスチナ間のコミュニケーションを促進するだけでなく、社会的弱者の救済をどう行うかも「平和実現」の大きな課題だと痛感した。

スタディ・ツアーは、「平和」について考える良い機会になった。私は、両国の現実を自身の肌身で感じることで、自分なりに「平和」を捉え直すことができたと思う。

2017年度のスタディ・ツアー参加者はスタッフを含め8名でした。全員の感想はホームページをご覧ください。

<http://seichi-no-kodomo.org>

募るパレスチナ人の絶望感 交流の芽をなんとか

村上 宏一（当法人理事・元朝日新聞中東アフリカ総局長）

NPO法人「聖地のこどもを支える会」は今年も、イスラエルとパレスチナから若者を招き、日本の若者を交えて交流を図るプロジェクトを実施します。交流を語るには、イスラエル・パレスチナ関係を楽しめる材料は乏しいのですが、最近では特にパレスチナ側に絶望感が広がり、深まっているらしいのが気になります。



ここでちょっとパレスチナ難民のことを見てみましょう。1948年5月のイスラエル建国宣言を機に周辺アラブ諸国との間に起きた第一次中東戦争の時、戦火を逃れるために避難した居住地がイスラエル領になったため、70万～80万人のパレスチナ人が難民になったといわれています。周辺アラブ諸国に逃れた人も多く、故郷に戻ることもできず三世代、四世代と難民のまま人口が増え続け、国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が管轄するヨルダン、レバノンなどの難民キャンプは300万人を超える人口を抱えているそうです。

ヨルダンのパレスチナ人の多くはヨルダン国籍を得られるのに対し、レバノンでは市民権を持てず、就労も厳しく制限され、キャンプに閉じ込められた住民は軍の許可なしには出入りもできないとか。元朝日新聞記者で、2015年からフリージャーナリストとしてバイルート郊外のシャティーラ難民キャンプを定点観測し続けている川上泰徳さんによると、12カ所ある難民キャンプのうち取材に入れるのはシャティーラだけだということです。住民の出入りも規制が緩いからましなのかというと、普通に教育を受けることも仕事に就くこともできないので八方ふさがりであることに変わりはないとのこと。このような境遇なのでイスラム国（IS）のような過激組織のリクルートの場になることは、容易に想像できます。

難民キャンプはパレスチナ自治区のヨルダン川西岸・ガザ地区にもあります。UNRWAによると西岸には19カ所に計80万人近くが、ガザには

8カ所に計130万人がいます。キャンプといってもテントが並んでいるわけではなく、一見すると古びてはいても普通の建物が密集しているように見えます。その光景に「割とちゃんとした所に住んでる」と感想を漏らした日本の女優がいました。しかし、テントに象徴される仮住まいのみじめさはないものの、そこから抜け出せる見通しがなく、永続する住まいにせざるを得ない悲しさを見るべきなのです。震災避難者の仮設住宅暮らしが長引いているようなものですが、それが何世代にもわたっているわけです。

当NPOは毎年3月のスタディ・ツアーで、日本の若者数人をイスラエル、パレスチナに送り、現地の様子を見聞きしてもらっていますが、今年の訪問先の一つに、西岸のベツレヘム近郊にあるアザ（別名ベイト・ジブリン）難民キャンプがありました。引率役の井上弘子理事長によると、約1300人が住むこのキャンプの環境はひどいもので、母子5人全員が知的障害を抱えているというある一家は、4人四方ほどの一つの部屋に暮らしており、案内してくれた人は「このような境遇は稀な例ではない。こんな状態が放置されている。世界は難民のことを忘れている」と言っていたそうです。

難民キャンプに暮らすパレスチナ人たちは、第一世代の人々が逃れてきた地を直接知らない世代になっても、そこを故郷として帰る日を夢見てきたのでした。しかし、1993年の自治合意の取り決めで、難民の「帰還」問題は交渉の中で話し合われることになっていたものの、まともに議題として取り上げられ協議されたことはありません。難民の境遇から抜け出せる見通しは、今のところまったくないといっているでしょう。遠く離れた他国のキャンプに住む難民の絶望感は深まるばかりです。

これに対し自治区に住むパレスチナ人たちは、いまだ自分たちの国を持ててはいないものの、自分たちの土地に足を付けている分、まだ希望が持

てるのではないかと思います。ところが、今回のスタディ・ツアー一行が会ったパレスチナ人の若者からは「いっそイスラエルに組み入れられた方がいい」という、思いがけない言葉がこぼれ出たというのです。

「イスラエルとパレスチナの二国家共存」。これがパレスチナ側にとって和平へ向けた絶対の条件であり、和平交渉を見守る国際社会の大方が支持する原則です。それに水を差すような考え方が身内に湧いてきているとは。なぜそんなことになるのでしょうか？ 理由は、自治政府への不信です。

パレスチナ自治区は西岸とガザの、分断された二つの地域から成り立っています。一応、統一政府とされているものの、実質的には、長年イスラエルとの武装闘争を続けていたパレスチナ解放機構（PLO）の主流派ファタハが西岸を支配し、イスラム原理主義組織ハマスがガザを支配する状況が2007年以降続いています。イスラエルとの自治合意を結んだファタハが、1994年に発足した自治政府を担ってきましたが、役人などの縁故採用や幹部たちの汚職が目につくというので信用を失っていったのです。

これに対しハマスは医療、福祉など地道な活動で住民たちに支持を広げていきました。特にガザでの支持は強く、ファタハは2006年末のハマスとの武力衝突に敗れて以降、西岸のみを拠点に自治政府代表を名乗っています。住民の評判は悪



自由を望むパレスチナ人の叫びが描かれた分離の壁の内側。
（ベツレヘム）

くとも、イスラエルを承認しないハマスがイスラム過激派だとして国際社会に受け入れられないことに助けられているのが実態で、住民には現政府に代わる選択肢がないのです。

和平の見通しが立たず、暮らしにも希望が持てずに不満を募らせるパレスチナ人。和平交渉の一方の当事者であるイスラエル国民にとって、相手の側に不満がたまり絶望感が募ることは、いずれ爆発につながりかねず、望ましくないはずですが、しかし、巨大な分離壁の反対側は見え、どんな様子が知らなくてもすんでいます。

イスラエルの側から、パレスチナの若者たちの声に耳を傾けるシンポジウムのような呼びかけが起きないものだろうか――ふと、そんな夢をします。

当NPOが遠く離れた日本で試みるイスラエル・パレスチナ青年交流は、スプーンで水をまいて砂漠を潤そうとしているような活動です。それでも、何かをしようという若者が少しずつでも出てくれば、という思いを励みにしています。

聖地の子どもたちを支援してくださる日本の皆様へ

感謝のチャリティ・コンサート

ヤクーブ・ガザウィ パイプオルガンの響き

ヤクーブは、現在「聖墳墓教会」（エルサレム）、「聖誕教会」（ベツレヘム）、

「受胎告知教会」（ナザレ）など聖地の主要教会のオルガニスト。

当法人のプロジェクトに数多く参加し、今は当会現地スタッフとして活躍しています。

そんな彼が日本の皆様への感謝のため、また「聖地の教育支援」のために、

この夏チャリティ・コンサートを開きます。

8月下旬から9月上旬にかけて、東京や仙台などで、複数回開催予定。

詳細は「オリーブの木」次号でお知らせします。ご期待下さい。

聖墳墓教会（エルサレム）で演奏中のヤクーブ ▶



Pipeorgan
Ya'coub GAZAWI

平和の架け橋

PROJECT 2017 inヒロシマ

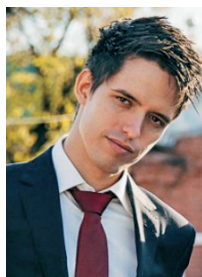
イスラエル・パレスチナ参加者からのメッセージ

イスラエル



ダナ・マガル
(22歳)

私は兵役を終わり、現在医師になることを志して勉強中です。今回応募したのは、紛争相手であるパレスチナ人の苦しみに心を開いて耳を傾け、理解を深めたいからです。今までパレスチナ人と話したことがなく、友だちもいないので、今回のプロジェクトはとても素晴らしい機会です。新しい人々や文化に出会うのが大好きで、東南アジア各国を旅行しましたが、日本は初めてです。



イゴール・セミョノフ (24歳)

私にとってプロジェクト参加はこれで2回目、最初は2013年に大槌町へ行き、いのちの尊さや平和の大切さについて沢山のことを学びました。紛争の原因は、コミュニケーション不足から互いの理解が足りず、結局双方の憎しみや恐怖が増幅することから始まると思います。だから3カ国の青年と共同生活を通して互いの友情を育むこのプロジェクトに、もう1度参加できるのを心から嬉しく思います。



バシャ・クリツーカー (22歳)

私はアリエル大学の1年生ですが、アルバイトではアラブ人と仲良く一緒に働いています。自分の経験から、イスラエル人とパレスチナ人は平和の内にともに共生できると信じています。これからの子どもたちが「普通」の子ども時代を過ごすことができるように、そして兵役の義務がなくなるように、一日も早く平和が実現することを願っています。



ロドルフ・サアデ (19歳)

私は音楽が大好きで、エルサレムのナイツ合唱団でテノールを歌っています。最近打楽器も始めました。イスラエルとパレスチナの平和実現には相互の譲り合いが必要だと思うし、特にイスラエルが占領政策や入植活動をすぐにやめることだと思います。

日本で新しい友だちに出会い、素晴らしい文化に触れることを楽しみにしています。



モラン・クナフォ (23歳)

兵役中はヨルダン川西岸地区で衛生兵を務め、紛争の現実を目の当たりにしました。辛かったです。紛争を激化させているのは、過激派。私の夢は、平和を望む人々とともにみんなで勇気を持って「戦争は嫌だ!」と声を上げ、いつか平和を実現することです。このプロジェクトで「平和の架け橋」をつくらうとする3カ国の青年たちと交流する機会をいただいて、とても嬉しく思います。

2017プロジェクトの概要

日程 2017年
8月3日(木)～17日(木)【15日間】

プログラム

第1部 広島で「平和の学び」

平和祈念式典、平和行進などへの参加。被爆者をはじめとした現地の方々、若者たちとのふれ合いを予定。

第2部 長野で国際文化交流、ボランティア活動など ヒロシマでの学びや、紛争体験などの分かち合い。

第3部 東京・JICAでワークショップ

プロジェクトの体験を共有し、平和実現の道について考えます。一般の学生、社会人に平和メッセージを発信。

細部は計画中



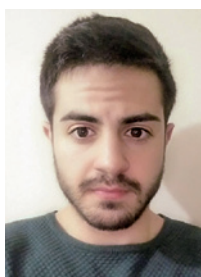
紛争国イスラエルとパレスチナの若者が、日本の若者とともに、広島、長野において、「平和の尊さ」を学び、共同生活、ボランティア活動、市民交流をとおして、平和共存の可能性を体験し、互いに相手を大切にすることを学びます。

3カ国の若者は、文化、宗教、人種の違いを超えて、互いの経験に耳を傾け、相手の痛みに関心する心を養います。また広島や長野で、人々とのふれ合いを通して、平和といのちの尊さについて考えます。



ジャック・
ダーダル (21歳)

私の訪日は2回目、最初は2015年、「平和の架け橋 in 東北」で大槌町へ行きました。私の人生で最高の2週間でした。私はこの経験を活かして今回はいろいろとスタッフを助け、みんなで素晴らしい平和プロジェクトが実現できるように貢献できれば嬉しく思います。そして帰国してから多くの人々に、日本で学んだ平和のメッセージを発信するつもりです。



イッセディン・
ダジャーニ (21歳)

アンカラ大学で90カ国以上の留学生とともに勉強する中で、互いに理解し合い、多様性を受け入れ合うことが、いかに大切であるかを学びました。

日本は第2次世界大戦の悲劇から、この70年あまりの間に素晴らしい繁栄の社会を築き上げました。しかし私たちの祖国イスラエルとパレスチナは残念ながら、その間ずっと紛争を続けてきたのです。

私はまだイスラエル人と平和について話し合ったことがありません。だから今度日本で、始めて彼らと出会い、理解し合えることを楽しみにしています。日本人の参加者も私たちの話し合いを助けてくれるでしょう。



タリーヌ・ラマ
(26歳)

私はこの度、3カ国の若者たちが「平和の架け橋」をつくって友情を育むというこのプロジェクトに参加できるのを心から感謝しています。争いはいつも、自分の利益だけを考えて相手の苦しみや必要を無視することから始まります。日本で私たち若者が互いにどんなに違っても、話し合い、受け入れ合い、理解し合い、愛し合うことによってより良い社会をつくる体験をするのは、ほんとうに素晴らしいことです。

また、日本で新しい文化に触れ、新しい人々に出会うのをわくわくしながら待っています。



ジョージ・
タドロス
(19歳)

私の専攻は建築学、趣味は水彩画、パレスチナ伝統ダンスと演劇です。私がこのプロジェクトに参加を志望した動機は、平和達成のためには、どうしても相手のことを理解し、話し合わなければならなかったからです。私たちに必要なのは「壁」ではなく「橋」です。私たちが力を合わせて「橋」を築けば、私たち自身と子どもたちや孫たちのために、希望の光を与えることができると思います。

私たちは互いに憎み合うことをやめて、同じ人間として受け入れ合うことが必要です。日本で、日本人のおかげでこの貴重な体験ができるのを嬉しく思います。

「平和の架け橋」プロジェクト 2017 in ヒロシマ 支援イベントのお知らせ

出川展恒でがわのふひさ講演会



NHK解説委員

混迷する中東情勢を読む
—イスラエル・パレスチナ紛争の行方

IS(イスラム国)の脅威、シリア内戦、トランプ政権の誕生…イスラエルとパレスチナをめぐる最新情勢をわかりやすく解説。

7/2(日) 12:00 (開場11:45)
カトリック吉祥寺教会 ¥1,000

イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい
ジャズコンサートとビュッフェのひととき

出口誠メッセンジャーズ

出口 誠(ピアノ)・右近 茂(サクソ)・山口 雄三(ベース)

パレスチナ料理店<アルミーナ>によるビュッフェタイム
併催◎イスラエル、パレスチナグッズ お楽しみバザール

7/17(月・休) 17:00 (開場16:30)

ニコラ・バレ(幼きイエス会) 9階ホール

(JR、地下鉄「四谷」駅前)

¥5,000 80名限定

チケットのお申し込み・お問い合わせは…… TEL 03-6908-6571 (当法人事務局) TEL 090-6538-3255 (井上)

2017 スタディ・ツアーの一コマ



▲エルサレムでのフレンドリー・ミーティング。イスラエル人、パレスチナ人、日本人が一堂に……。



▲ベツレヘム大学を訪問。イスラム教徒、キリスト教徒の学生も一緒に。



▲聖ヨゼフ学院、幼稚園年中組。(エルサレム)



▲名誉殺人を免れた赤ちゃんのための『飼い葉桶乳児院』にて。(ベツレヘム)



▲聖ヨゼフ学園の中学生たち。(エルサレム)



▲ギリシャ正教の学校の休み時間。校庭は狭そう。(エルサレム)

活気ある街角 (エルサレム旧市街 ダマスカスゲート)



▲おいしそうなイチゴが1kgでたったの300円!!



▲新鮮な野菜やハーブを並べて。近郊からおばさんたちが売りに来る。



▲すぐそばでは、イスラエル軍の兵士が警備中。